

専門日本語教育における専門連語の選定

——経済記事の「基本的な専門語十を十動詞」を例に——

小宮千鶴子

- 〈目次〉
- 1 専門連語とは
 - 2 経済の基本的な専門語
 - 3 専門連語の選定
 - 3-1 3種の専門語群による連語の相違
 - 3-2 日常=専門語による連語
 - 3-3 使用頻度と類義関係の整理による専門連語の選定
 - 4 選定結果の評価
 - 4-1 全体の評価
 - 4-2 問題点
 - 5 専門連語の指導

1 専門連語とは

専門語はそれぞれの専門分野において重要な語であり、とくに高校までに学習する「基本的な専門語」は、大学での専門教育の基礎となる重要語である。ところが、それらは日本語教育でも専門教育でも見落とされやすい。そこで、その指導を目指して、先に「経済の基本的な専門語」の特定を試みた(小宮 1995)。

経済の基本的な専門語は、専門的な概念を表すが、それらの含まれる講義や文献を理解し、発表やレポート作成を行うには、下例の「公債」「通貨」のような専門語の概念を理解するだけでなく、「公債を発行する」「通貨が膨張する」のような、専門語を含んだ連語によって表される専門的概念をも理解する必要がある。

例) 中央銀行が買い取る方法で公債を発行し、軍事費など非生産的な方面にその資金を使用すると、実質的な経済活動に必要な通貨量以上に通貨が膨張し、貨幣価値が下がって インフレーションをひき起こすことになる。

専門語辞典で「公債」を引くと、「公的貨幣債務一般のこと。」とあるが、これだけでは漠然としていてわかりにくい。「公債を発行する」「公債を買い取る」などの連語になって初めて、「公債」の概念もより明確に理解される。他の専門語の場合も同様で、「資金を使用する」「資金を賄う」、「通貨が膨張する」「通貨が安定する」、「貨幣価値が上がる」、「貨幣価値が下がる」、「インフレーションをひき起こす」「インフレーションを収める」のように、連語レベルでの専門的概念の理解が重要である。このように、専門語を含んで専門的概念を表す連語を「専門連語」と名付ける。

専門連語は専門語を含む連語であるが、専門語を含む連語のすべてが専門連語というわけではない。「公定歩合」という専門語を例にすると、「公定歩合が上がる」や「公定歩合を引き下げる」は、専門的概念を表す専門連語と

いえるが、「公定歩合がわかる」「公定歩合を考える」は、連語としては専門的概念を表すとは判断されないため、専門連語とはいえない。専門語を含む連語が専門連語か否かを具体的に判定するのは困難な場合もあるが、専門語を含む連語の中に専門連語と判断されるものとそうでないものが存在するという認識は、専門語を連語レベルで考えるうえで重要である。

専門連語は専門語と同様に専門的概念を表すが、現在よく目にする専門語辞典には専門語の概念が記述されているのみで、専門連語の重要性は看過されている。このような辞書は、自力で適切な専門連語を作るのが困難な日本語学習者には不十分なものである。同様のことは、程度の差はあれ、専門分野の学習が初期の段階にある日本人学生や、専門外の分野に初めて取り組む一般日本人についてもいえよう。

専門語の理解や使用を指導するため、専門連語は専門日本語教育においてとりあげる必要があると思われるが、その基礎となる専門連語の選定方法はいまだ確立していない。専門連語か否かの判定は、本来、個々の連語に即して行うべきであるが、判定者によるゆれが避けがたく、処理量にも限りがあるため、教材化を目的とした選定には不向きである。そこで、客観的、かつ、効率的な選定方法として、計量的な方法を用いてみることを考えた。

小論は、「基本的な専門語＋を＋動詞」形式をとる専門連語を例に、それらを文章から計量的に抽出する方法について検討することを目的とする。資料とする文章は、新聞の経済記事1年分である。新聞を資料に選んだのは、①経済に関する幅広い話題の文章がある、②一般の読者を想定している、という2点が、経済の基本的な専門語を含んだ専門連語を収集する対象としてふさわしいと判断したためである。

2 経済の基本的な専門語

小論での専門連語の選定方法について述べるまえに、「経済の基本的な専門語」の特定方法などにつき、以下に概略を記す。詳しくは、小宮（1995）

を参照されたい。

経済の専門語の中でも基本的なものを抜き出すために、高校の「政治経済」教科書の本文（経済部分）を資料とし、そこに用いられた語が立場の異なる次の7種の経済の専門語辞典類に見出しあるいは索引の語としてあるかどうかを調べ、1種以上の辞典にあれば専門語と認定した。

- 1) 中学社会用語事典編集委員会編『中学公民用語事典』山川出版社、1992年
- 2) 衛藤藩吉監修『現代社会用語集 改訂版』山川出版社、1991年
- 3) 政治・経済教育研究会編『政治・経済用語集』山川出版社、1991年
- 4) 金森久雄他編『有斐閣経済辞典（新版）』有斐閣、1986年
- 5) 大阪市立大学経済研究所編『経済学辞典 第3版』岩波書店、1992年
- 6) オリエンタル・エコノミスト編『新経済用語和英辞典』東洋経済新報社、1985年
- 7) KIT 教材開発グループ編『ビジネス用語集』凡人社、1990年

その結果、799語の「経済の基本的な専門語」を得た。それらを、概念が中心のか否か、日常語か否かの2点から分類した。ある語が教科書の本文でゴシック表記されているか、巻末索引に掲載されている場合には、中心的概念の語とし、いずれにも該当しない場合は、周辺的概念の語とした。また、ある語が日本語能力試験出題基準⁽¹⁾の1級の語彙に含まれれば日常語、そうでなければ非日常語とした。これは、専門的概念を表す語が専門語であるとする規定から、「サービス」のように日常語と専門語の2用法をもつ語と、「公定歩合」のように専門語用法のみの語とを分けるため設けた基準である。

上記の2種の分類基準により基本的な専門語は4種類に分かれるが、日常語は大半が周辺的概念の語であるため、概念が中心のか周辺のかを問わず、日常＝専門語としてまとめた。その結果、表1のように、799語の基本的な専門語は、「日常＝専門語」(304語)「中心的概念の専門語」(133語)「周辺概念的専門語」(362語)の3種に分かれた。表2、表3、表4は、それぞれ、日常＝専

門語, 周辺の専門語, 中心的専門語の例である.

表1 経済の基本的な専門語の分類

	中心的概念の語	周辺的概念の語	
日常語	14 語	290 語	→ 日常 = 専門語 304 語
非日常語	133 語	362 語	

表2 日常 = 専門語の例

買い 海運 外貨* 海外 外国 会社 回収 外部 回復 価格 化学 拡充 学習 家計 加工 貸出し 果実 過剰 ガス 価値 合併 金 株式 貨幣* 為替 関係 監視 関税 監督 機械

*は中心的概念の語を示す

表3 周辺の専門語の例

海外投資 外国為替銀行 外国通貨 外国貿易 解体 買い手 開放経済体制 科学技術 化学工業 化学肥料 家業 貸出し金利 貸出し利率 貸付け 家族従業者 家内労働者 金詰り株主

表4 中心的専門語の例

買いオペレーション 外貨割当制度 外国為替 外国為替相場 価格差補給金 株式会社 カルテル 為替相場 間接税 完全雇用 完全失業者 管理通貨制度 技術革新 逆進税 恐慌 均衡財政

3 専門連語の選定

3-1 3種の専門語群による連語の相違

まず, 資料から得られる「経済の基本的な専門語 + を + 動詞」形式の連語の量的な面に「日常 = 専門語」「周辺の専門語」「中心的専門語」による差が見られるか否かを以下の手順で調査した. その結果, 日常 = 専門語による連

語の用例がもっとも多種多量であったため、日常＝専門語の連語に絞って専門連語の選定を試みることにした。

①毎日新聞の1993年分の経済記事（CD-ROM版）7004件を資料に、「経済の基本的な専門語＋を＋動詞」形式の連語を3652種（6764例）取り出した。

②上記の連語を専門語が「日常＝専門語」「周辺の専門語」「中心的専門語」のいずれに属するかによって3群に分け、それぞれについて、「連語を作る専門語の割合」「異なり連語数」「延べ連語数」「一専門語あたりの異なり連語数」を調査した。

表5 連語を作る専門語の数とその割合

専門語の種別	総数	連語を作る専門語の数	連語を作る専門語の割合
日常＝専門語	304語	222語	73.0%
周辺の専門語	362	131	36.2
中心的専門語	133	27	20.3

表6 異なり連語数、延べ連語数と一専門語あたりの異なり連語数

専門連語の種別	異なり連語数	延べ連語数	一専門語あたりの異なり連語
日常＝専門語の連語	3027種	5721例	13.6種/語
周辺の専門語の連語	550	919	4.2
中心的専門語の連語	75	124	2.8

表5によると、日常＝専門語は連語を作る専門語の数が222語で、周辺の専門語の1.7倍、中心的専門語の8.2倍となり、3群のうちで連語を作る専門語の数をもっとも多かった。また、日常＝専門語は連語を作る専門語の割合が73.0%で、周辺の専門語の2.0倍、中心的専門語の3.6倍となり、連語を作る専門語の割合ももっとも高かった。

表6によると、日常＝専門語の連語は、異なり連語数が3027種で、周辺の専門語の連語の5.5倍、中心的専門語の連語の40.4倍となり、3群のう

ちでもっとも多種の連語が作られた。また、延べ連語数も日常＝専門語の連語は 5721 例で、周辺の専門語の連語の 6.2 倍、中心的専門語の連語の 46.1 倍と、もっとも多くの連語が使われた。さらに、表 6 の「異なり連語数」を表 5 の「連語を作る専門語の数」で割った「一専門語あたりの異なり連語数」についても、日常＝専門語が 13.6 種/語で、もっとも多種の連語を作り、周辺の専門語の 3.3 倍、中心的専門語の 4.9 倍であった。

表 5・6 の結果から、すべての調査項目において日常＝専門語がもっとも多種多量の連語を作ることがわかったため、専門連語の選定対象を「日常＝専門語の連語」3027 種 (5721 例) に限ることにした。

3-2 日常＝専門語による連語

222 語の日常＝専門語は 3027 種の異なる連語を作ったが、それを専門語ごとにまとめた全体が図 1 である。各語は 1～78 種の連語を作ったが、多種の連語を作った語は少なく、大半は限られた種類の連語しか作らなかつ

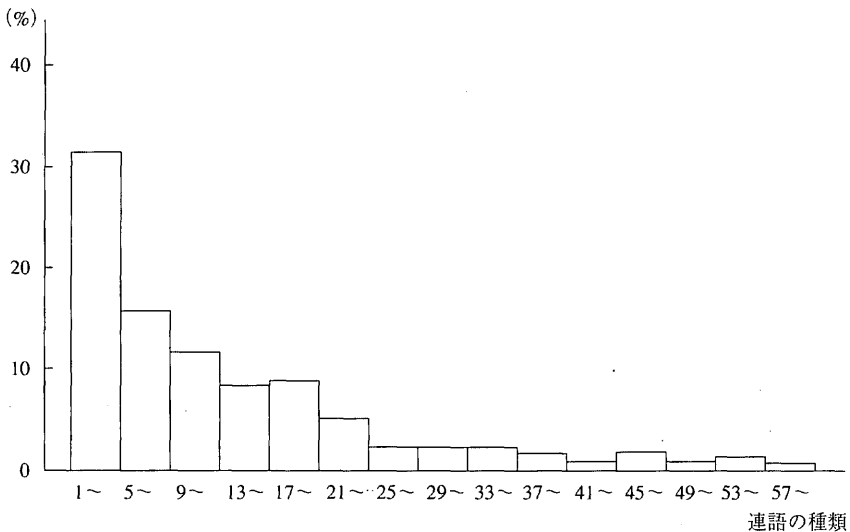


図 1 日常＝専門語が作る連語の種類 (異なり)

表7 多種の連語を作った日常=専門語

政策78, 資金64, 会社56, 価格54, 商品54, 計画50, 事業50, 市場49, 生産46, 目標46, 利益46, 関係45, 内容43, 販売43, 企業39, 取引39, 黒字38, 水準38, 輸出38, 回復36, 技術36, 一部34, 見通し33, 工場33, 部門33, 導入32, 仕事31, 投資31, 輸入31

た。表7は多種の連語を作った上位の日常=専門語を示したものである。

日常=専門語の連語は延べで5721例あったが、各連語の使用頻度には1~89の幅があった。図2はその全体を示したものであるが、使用頻度の高かった連語は少数で、大半は使用頻度が低かった。⁽²⁾表8は、使用頻度の高かった上位の連語を示したものである。

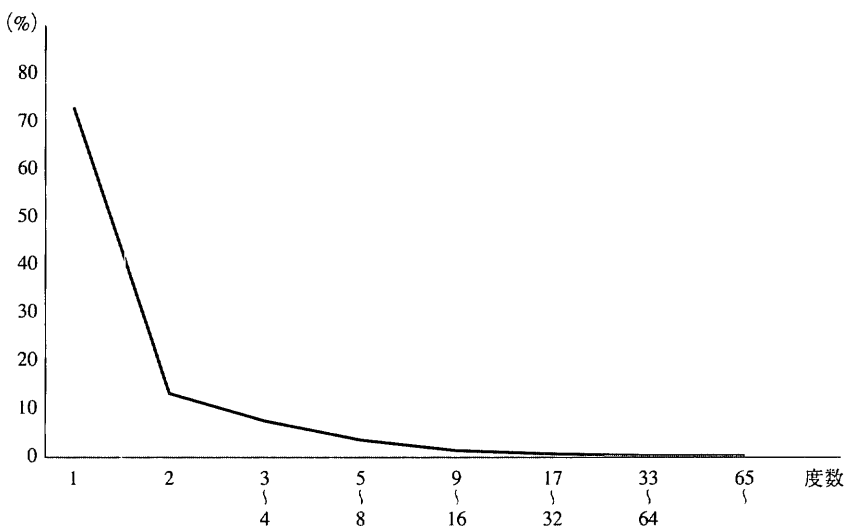


図2 日常=専門語の連語の使用頻度 (延べ)

表 8 使用頻度の高かった日常＝専門語の連語

取引を終える89, 会社を設立する81, 影響を与える68, 影響を受ける45, 仕事をする31, 影響を及ぼす30, 見通しを示す30, 赤字を出す29, 景気を読む28, 目標を設定する26, 計画を発表する23, 見通しを発表する22, 供給を受ける21, 自動車を除く21, 販売を始める21, 工場を建設する20, 赤字を計上する20, 生産を始める19

3-3 使用頻度と類義関係の整理による専門連語の選定

日常＝専門語の連語から専門連語の候補を選定するに際して、次の2点を前提に、選定方法を考えた。

A) 基本的な専門連語はくり返し用いられる。

B) 一つ概念に対する専門連語が一つとは限らない。

A) は、基本語が文章中でくり返し用いられるように、基本的な専門連語も資料中でくり返し用いられるであろうという前提であるが、図2が基本語のL字型曲線とみなせることから、前提として妥当なものと思われる。この前提から使用頻度による専門連語の抽出という方法が示唆される。すなわち、基本的な専門連語の使用頻度が高いならば、使用頻度の高い連語を取り出せば、そこには基本的な専門連語が数多く含まれているはずである。それに対し、使用頻度の低い連語の中には、基本的でない専門連語や、専門連語ではない連語などが、混在すると予想される。

B) は、概念と専門連語との対応が1対1ではなく、一つ概念に対して複数の専門連語が対応する場合があるという前提である。専門連語の表す概念は、専門語の場合と同様に、明確に定義されていなければならないが、本稿で扱った専門連語は専門語の名詞と一般語の動詞とから成るため、一般語の部分から「株式を買う」と「株式を購入する」のような、複数の類義の連語が生じる可能性がある。このことから、類義関係の連語をまとめることで

表9 選定された専門連語の候補

	使用頻度	専門語	級	動 詞
1	10	サービス	2	開始する・始める
2	100	影響	2	与える・及ぼす・もたらす
3	47	影響	2	受ける・被る
4	20	影響	2	懸念する・考える・考慮する・心配する
5	18	円	4	買う・買い進める・買い進む
6	36	価格	4	下げる・引き下げる・抑える・冷やす
7	34	価格	2	決める・設定する・つける(付ける)・決定する
8	16	価格	2	上回る・超える
9	10	価格	2	値上げする・引き上げる・上げる
10	87	会社	4	設立する・作る
11	15	回復	2	図る・目指す・狙う
12	14	割合	2	引く・差し引く
13	11	割合	2	示す
14	20	株式	1	売却する・売る
15	10	株式	1	保有する
16	13	関係	3	持つ・結ぶ・築く
17	12	基準	2	設ける・設定する・作る
18	12	技術	3	開発する
19	11	技術	3	供与する・移転する
20	10	技術	3	応用する・活用する・生かす・利用する
21	21	供給	2	受ける
22	13	業務	1	行う・営む
23	12	金(かね)	2	使う・払う・出す
24	28	景気	2	読む
25	20	景気	2	下支えする・引っ張る・回復させる・刺激する・押し上げる・元気づける
26	10	経営	2	圧迫する
27	24	計画	3	立てる(たてる)・策定する・作る・作成する
28	23	計画	3	発表する
29	13	計画	3	進める
30	13	計画	3	打ち出す・示す・提示する
31	30	見通し	1	示す
32	23	見通し	1	下方修正する・修正する
33	22	見通し	1	発表する
34	11	交換	2	行う・する
35	15	効率	1	高める・上げる
36	30	工場	3	建設する・建てる・増設する・造る・新設する
37	22	黒字	1	減らす・削減する・抑制する・半減する・抑える
38	13	作業	2	行う・する
39	31	仕事	4	する
40	20	資金	1	調達する・集める・賄う・用意する
41	18	資金	1	投入する・つぎ込む・振り向ける・導入する
42	21	自動車	4	除く
43	97	取引	1	終える・終了する
44	12	取引	1	する・行う
45	15	需要	2	喚起する・掘り起こす・生み出す・広げる・伸ばす
46	11	商品	2	出す・開発する・製品化する
47	15	条件	2	付ける(つける)・出す
48	13	水準	2	更新する・再更新する
49	12	水準	2	上回る・超える
50	11	水準	2	維持する

	使用頻度	専門語	級	動 詞
51	10	水準	2	下回る・割り込む
52	13	制限	2	設ける・行う・する・加える
53	17	成長	2	続ける
54	14	成長	2	遂げる・達成する・記録する・実現する
55	20	政策	1	とる(取る)・行う・実行する・講じる
56	11	政策	1	打ち出す・掲げる・出す
57	32	生産	2	始める・開始する
58	18	生産	2	中止する・休止する・打ち切る
59	12	生産	2	行う・する・上げる
60	52	赤字	1	出す・計上する・記録する
61	11	赤字	1	削減する・減らす・半減する
62	10	赤字	1	抱える
63	24	損失	1	計上する・出す
64	32	調査	2	実施する・行う・する
65	19	調査	2	開始する・始める
66	15	調査	2	発表する
67	10	調査	2	まとめる
68	10	電力	2	除く
69	10	投資	1	する・行う
70	18	統計	2	取る
71	10	内容	2	詰める(つめる)・検討する・見直す
72	36	販売	2	始める・開始する
73	21	販売	2	見込む・計画する・予定する
74	17	販売	2	行う・する
75	10	販売	2	中止する・やめる・停止する
76	13	範囲	2	広げる・拡大する
77	24	比率	1	高める・引き上げる・拡大する・上げる・増やす
78	11	不況	1	反映する
79	11	不況	1	乗り切る・克服する・乗り越える
80	14	負債	1	抱える
81	41	目標	2	設定する・立てる(たてる)・定める・決める
82	13	目標	2	掲げる・示す
83	11	目標	2	達成する
84	16	融資	1	受ける
85	14	融資	1	行う・する
86	10	予算	2	組む・編制する
87	29	利益	2	上げる(あげる)・出す・もたらす・生む

専門連語を概念の面から整理する方法が示唆される。

以上の、使用頻度と類義関係の連語の整理という二つの方法により、次の手順で専門連語の候補を取り出した。

③日常＝専門語の連語全体から、使用頻度1の連語(異なり連語数の70%以上を占める)を除き、使用頻度2以上の連語830種(3524例)に絞った。これは、日常＝専門語の異なり連語数の27.4%、延べ連語数の61.6%にあたる。

④それらにつき、「価格を下げる」と「価格を引き下げる」、「黒字を減らす」と「黒字を削減する」のような類義関係や、「価格を付ける」と「価格をつける」のような同語異表記をまとめ、602類とした。

⑤基本的な専門連語の選定のため、使用頻度を高い方の類から順に足した累計の比率（累積使用率）が50%を越える、使用頻度10以上の連語87類（1783例）を専門連語の候補として選定した（表9参照）。これは日常＝専門語の異なり連語数の4.0%、延べ連語数の31.2%にあたる。

4 選定結果の評価

4-1 全体の評価

選定された表9の連語には、「株式を売却する・売る」、「不況を乗り切る・克服する・乗り越える」、「需要を喚起する・掘り起こす・生み出す・広げる・伸ばす」（動詞は使用頻度の高い順。以下同様）のように、専門的な概念を表すと判断される専門連語が数多く含まれていた。

それに対し、表9に選定されなかった連語には、専門連語とはいえないものが多く含まれていた。まず、3-3の③で除いた使用頻度1の連語には、「会社を愛する」「貿易を担当する」「たばこを吸う」「数字を使う」のようなものがあつた。さらに、3-3の⑤で除いた使用頻度2～9の連語にも、「銀行を通じる」「企業を選ぶ・しぼる」「酒を飲む・酌み交わす」のようなものがあつた。

以上の点から、計量的な方法による今回の専門連語の選定は、全体としては、一応の成功を収めたといえよう。

4-2 問題点

今回の選定は、使用頻度と類義関係の整理とによって客観的かつ効率的に専門連語が選定できないかという問題意識のもとで試みられたが、その問題

点を使用頻度の問題と類義関係の整理の問題とに分け、以下に述べる。

まず、使用頻度の問題であるが、表9に選定された連語の中には、「影響を与える・及ぼす・もたらす」「目標を設定する・立てる(たてる)・定める・決める」, 「調査を実施する・行う・する」のように、使用頻度が高いにもかかわらず、専門連語とは判断しにくいものがあった。

その主な原因として、「影響」「目標」「調査」などが「価格」「株式」「投資」などと比べ、あまり経済の専門語らしくないという問題がある。「影響」などは、経済の基本的な専門語の認定に用いた7種の専門語辞典類のうち専門語の範囲をかなり広くとる『新経済用語和英辞典』と『ビジネス用語集』(ともに前掲)のいずれかによってのみ認定された語で、他の辞典類にも認定された語とは専門語らしさに違いがあるように感じられる。が、使用頻度も高く、経済に関する文章を構成する上で重要な連語であることは間違いないため、「専門記述連語」などとして別に扱うべきではなからうか。

表9に選定されなかった連語の中には、「価格を願う」「株式を含む」「投資を反省する」(以上、使用頻度1), 「商品を利用する」「輸出を認める」(以上、使用頻度4~5)のように、専門語らしい専門語を含んではいても、動詞との組み合わせの問題から専門連語とは判断されないものもあった。それらは使用頻度の低さによって排除されたが、これは使用頻度による選定がうまく働いた場合といえよう。

それに対し、「価格を上げる」「株式を上場する」「投資を強化する」(以上、使用頻度1), 「商品を売る・販売する」「輸出を拡大する・促進する」(以上、使用頻度4~5)などは、使用頻度が低くても専門連語と判断されるが、排除された。これらは使用頻度による選定がうまく働かなかった場合であろう。

使用頻度による選定は2段階にわたって行ったが、第1段階の選定は第2段階に比べ、専門連語でないものを排除する効率が遥かに良いと感じられた。使用頻度1の連語を最初に排除するというのは、効果的な方法だと思われる。第2段階では累積使用率50%以上に絞ったが、この数にはさほど根

拠がなく、第2段階の扱いには再考の余地が大きい。電子化された資料を用いれば労力もさほどではないので、資料を増やし、使用頻度の違いを選定により反映させるというのも一つの方法ではなからうか。個別的判断と組み合わせることも考えられるが、使用頻度でかなり限定してからのの方が効率的であろう。

次に、類義関係の整理に関する問題であるが、整理の際は、「開始する・始める」のような狭義の類義関係だけでなく、「削減する・半減する」のような包摂関係、さらに、「金(かね)を使う・払う・出す」のように連語レベルで初めて類義関係と判断されるものまで、幅広く対象に含めた。これは概念の面からの専門連語の大別化を第一の目標としたためであるが、包摂関係については、「黒字を減らす・削減する・抑制する・抑える」と「黒字を半減する」のように、意味の上位・下位に応じて異なる専門連語とすべきであろう。ただし、今回は資料の関係からそこまで行うことができなかった。

今後は、「を」格以外にも連語の範囲を広げ、専門連語の定義を深めるとともに、選定方法にも改良を加えていきたい。

5 専門連語の指導

専門日本語教育において専門連語の指導をどのように位置付けるかは、教授法全体にかかわる大きな問題なので、以下、専門連語の指導の枠内に限り、簡単に述べる。

表9の連語を構成する日常＝専門語の異なりは51語であるが、その内訳は、「供給」「景気」などの日本語能力試験出題基準2級の語彙が28語(54.9%)、「赤字」「株式」など同1級の語彙が15語(29.4%)で、両方で43語(84.3%)を占めた。このことから、これらの語を含む専門連語の指導は、中上級段階が中心といえる。

「会社を設立する・作る」のように類義関係にある連語が複数ある場合は、各連語の使用頻度と、「会社」「設立する」「作る」のような連語を構成する

語の指導段階との両方を考慮し、指導の時期を決める必要がある。

専門連語の指導で重要な点は、指導しようとする専門連語を同一の専門語をめぐる専門連語の体系のなかでとらえて指導することである。「価格」という専門語を例にすると、「価格を上げる」と「価格を引き上げる」は、同一概念を表す異なる連語であるのに対し、「価格を上げる」と「価格を下げる」とは、表す概念自体が異なる連語である。

専門連語の指導を実際に試みることで、専門連語の選定方法に改良すべき新たな観点を得ることもあろう。指導法自体の開発と合わせ、今後の課題としたい。

〔注〕

- (1) 国際交流基金・日本国際教育協会（1993）『日本語能力試験 出題基準（外部公開用）』（非売品）による。1994年に『日本語能力試験 出題基準』（凡人社）が発売された。
- (2) 使用度数の階級分けは、国立国語研究所報告 25『現代雑誌九十種の用語用字 Ⅲ—分析—』（1964）にならい、上限を2の n 乗ごとに区切った。

〔参考文献〕

- 石井正彦（1995）「言語研究からみた専門用語の課題——教科書にみる“仲間うちのことば”・“広場のことば——”」『専門用語研究』9
- （1997）「学術用語の造語成分の意味分類——『分類語彙表』を使って——」『第5回国立国語研究所国際シンポジウム第1専門部会発表論文集』
- 言語学研究会（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房。
- 国立国語研究所（1981）『専門語の諸問題』（宮島達夫氏担当）秀英出版。
- 小宮千鶴子（1995a）「専門日本語教育の専門語——経済の基本的な専門語の特定をめざして——」『日本語教育』86号。
- （1995b）「経済の基本的な専門語」『中央学院大学商経論叢』第10巻第1号。